



SDGs 日本一と、未来の子どもたちのために 環境活動の歩みは止まらない

「陸前高田ワタミオーガニックランド」開業をはじめ、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けながらも、ワタミグループの環境への取り組みはその歩みを止めることはありません。そこにある思いや、達成すべき目標に向けた考えなどを、代表取締役会長 兼 社長 渡邊美樹 と、執行役員 SDGs 推進本部長 百瀬則子の対談で紹介します。

コロナ禍でも変わらぬ環境への取り組み

百瀬 この1年、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて社会は大きな変化を強いられ、SDGsや環境保全への関心が薄れていると懸念されています。その中でワタミグループの取り組みは着実にその成果を上げてきました。

渡邊 世界中に影響を及ぼすようなパンデミックは、1918年から1920年にかけて流行したスペイン風邪以来のことです。現代社会においては誰にとっても初めての経験ですが、それが環境活動をワタミがストップする理由にはなりません。なぜなら、この活動は我々の存在そのものだからです。ワタミは状況がどうであろうと続けていく。そのためにコロナとどう向き合うかを考え、できるかぎりのことをやってきました。

百瀬 SDGsは2030年までの持続可能な開発目標ですが、そこで終わりということではありません。未来に向けた取り組みの最初の10年だと思うのですが、10年先、あるいは50年先、ワタミの取り組みはどのようなになっているのでしょうか？

渡邊 ワタミには「地球人類の人間性向上のためのよりよい環境をつくり、よりよいきっかけを提供すること」というミッションがあります。“人間性向上のためのよりよい環境”とは何かといえ、十分な食事がとれて、きちんと教育が受けられ、働き甲斐のある仕事に就けること。豊かな森やきれいな海などの自然も大切です。すなわち、我々が追い求めるのはSDGsそのもので、これは10年先、50年先も変わりません。取り組みの内容が変わることはあっても、その取り組み姿勢が変わることはないのです。

取り組み内容や成果を見える形で示す

百瀬 SDGs推進本部を設置して3年、その間に“脱炭素”“資源循環”の、本業中での環境活動が進みました。

渡邊 そうですね。そうした取り組みが進むのはいいことですが、スローガンで終わらないように、我々はもっと具体的に、目標やそこに至る経過も含めて、見える形で示していきたいと考えています。「RE100」※1の取り組みも2040年までに100%再生可能エネルギーという目標を掲げていますが、ゼロからいきなり100にはなりません。一昨年に「三代目 鳥メロ」笹塚店で100%再生可能エネルギーへの切り替えが完了し、愛知県津島市の「ワタミ手づくり厨房」中京センターや、本社での取り組みなども進めています。いつまでにどうやって30%、50%にするか、マイルストーンを示す必要もあると思っています。

※1 脱炭素を目指して、事業で使用するエネルギーを100%再生可能エネルギーにするという宣言

百瀬 中期目標を掲げて、確実に達成し続けるために、何が必要だとお考えですか。

渡邊 一人ひとりが意識を変え、行動することです。たとえば「RE100」達成のために資金を投入して、再生可能エネルギーを購入すれば、何の努力も必要ありませんが、それは企業の成長を阻むことになります。企業が成長を続けながら達成することが大事で、そのためには機器の見直しや新たな投資以外に、コストを減らすために知恵を絞り、例えば余分なコピーを減らす、節電するといった一人ひとりの行動が必要です。環境問題は企業の努力だけでできるのではなく、一人ひとりが未来の子どもたちのことを思い、自発的に行動を変えていくことが重要です。

百瀬 再生可能エネルギーの導入を進める一方で、資源循環の取り組みも進めています。愛知県からスタートした「ワタミの宅食」のプラスチック容器回収リサイクルも全国に拡大しました。

渡邊 使用済み容器を回収して、新たな容器としてリサイクルする仕組みはできましたが、回収率はまだ全体で50%程度です。お客様にもっと積極的に参加していただけるように、働きかけていく必要があります。

百瀬 まごころさん※2との会話を通して、容器回収の意義を伝えたり、自分たちの孫が暮らす未来の環境や暮らしを想像したりすることで、お客様の意識も変わっていくと思います。ただ、最近は会話の機会も減っていて、難しいですね。

渡邊 しかし、伝える方法は会話だけではなくありません。伝えるための工夫、情熱が大事です。一方で、我々としては他の企業とも連携して、弁当容器以外のリサイクルの仕組みづくりも進めていかなければいけません。

百瀬 そうですね。すでに名古屋市では外食企業5社と提携し、店舗から排出する残った食材を集めて飼料原料にして、育てられた鶏の卵を買い戻すという食品リサイクルの流れもできています。

※2 宅食弁当を各家庭に届けるとともに、高齢者の見守りも行う配達担当者

未来を生きる子どもたちのために

百瀬 今年4月には岩手県陸前高田市に「陸前高田ワタミオーガニックランド」がオープンしました。これも新型コロナの影響もあったと思いますが。

渡邊 確かに影響はありましたが、このタイミングでオープンできたことで、コロナ禍でも我々は大切なことを見失ったり、後回しにしたりしないという姿勢を示すことができたと思います。

百瀬 そうですね。ここでは5つの命題を掲げていますが、5番目の「子どもは未来の地球に対してワクワクし、大人は、未来の地球に対して責任を感じる場所であり続けます。」が、心に刺さりました。

渡邊 子ども時代に大いにワクワクして、大人になったら責任を持つ。それは当たり前の順番で、それをつなげていく場所にしていきたいです。

SDGs 日本一に向けた確かな歩みを

百瀬 最後に、今は困難な時代といわれますが、その中で行き先を見失うことなく、SDGs日本一を目指し、未来の子どもたちのために頑張っている社員や取引先の方々へのエールをお願いしますか。

渡邊 「無理はしないで」と言いたいですね。我々の取り組みは続けることが大事です。そのためには、「静かに、健やかに、遠くまで」。これを1日3回、自分自身に言い聞かせています。思いが強いと、つい無理をしてしまうこともあります。遠くまで行こうと思うなら、静かに、健やかでなければいけません。そしてもうひとつ。皆、同じ思いを共有してほしい。SDGsにさほど関心を持たずに入社した社員も多いと思いますが、そういう人は“なぜ、こんなことをやっているんだろう”、“なぜ、こんなことに本気なんだ”という疑問をもってほしい。疑問を持ち、関心を持つことで、どこかで“あ、そうか”と気づく。そうやって、気持ちを近づけていくことで、無理なくともに歩んでいける仲間になってほしい。お取引先の方々も同じです。ワタミの思いを少しでも理解していただき、協力していただければそれ以上にうれしいことはありません。

ね。ここはワタミグループが推進する6次産業モデルを具現化する場であり、命と向き合う場所でもあります。命が循環する有機農業を実践し、命の尊さを感じられる場所にしていきたい。有機農業のテーマパークとっていますが、実は、命のテーマパークなのです。

百瀬 修学旅行のメッカにしたいとお聞きしましたが、子どもたちにどんなことを学んでほしいとお考えですか。

渡邊 自分の命は自分だけのものではなく、ほかの命とつながっているということ。家族とか、血のつながりだけではなく、土の中に微生物がいて、そこで作物が育ち、それを食べる人や動物がいて、やがて土に戻る。それを理解すると、ほかの命に対する思いやりが生まれ、人や自然を大切にしようと思うようになるのではないのでしょうか。

百瀬 おっしゃる通りですね。そうした自然と子どもたちが触れ合う機会として、「北海道わたみ自然学校」があります。これは、20年以上になりますか。

渡邊 開校して25年目になります。最初は参加者が集まらず、うちの子どもや、取引先様に声をかけてようやく集めたんです。その子どもたちが今では立派な社会人になり、SDGsの担い手として活躍しているのうれしいですね。

百瀬 「持続可能な開発のための教育」(ESD)が提唱され、国連総会決議で2005年から2014年までの10年間で「国連ESDの10年」とする決議案が採択されたのが2002年です。それ以前からSDGsにつながる思いをもち、継承してきたのは素晴らしいことです。これはどのようなきっかけで始まったのですか。

渡邊 帯広の実験農場で有機栽培を始めたとき、私自身は農業経験がまったくありませんでした。そこで、自分でもやってみたいと思い1日体験をしたのですが、空が広く、風が心地よく、土が柔らかで、すべてが気持ちいい。子どものころにこの体験をしたかったと思い、子どもたちのための自然学校をつくろうと決めたんです。

百瀬 私も一昨年から参加していますが、本当に素晴らしい自然体験です。自然の中で遊んだ子どもたちが大人になって、自然を大切にしたいですね。

